

| | |
|------------------|---|
| Title | 先史地理學研究(小牧實繁著) |
| Sub Title | |
| Author | 有賀, 春雄(Ariga, Haruo) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1938 |
| Jtitle | 史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.206(704)- 207(705) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0207 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治初期經濟史研究

(慶應義塾經濟史學會)
紀要 第一冊

世界近世史上に於て最も急速な文化的發展を遂げたのは一八七一年統一完成以後の獨逸と明治維新以後の我が日本とであらう。然し徳川時代二百數十年が鎖國主義を墨守した保守退嬰の時代であつただけに、明治時代の發展は獨逸のそれより一段と目覺ましいものがあつたやうに思はれる。實に我國は明治維新以後殆ど反動的な進取主義を振り翳し、政治、經濟、教育、軍備その他に於て全く飛躍的な大發展を遂げた。それは文化百般の建設の時期であり、新日本誕生の晨且であつた。現代日本の政治も産業も凡てこの時代に基礎づけられ、今日世界に雄飛する我國の地位もこの時期に漸次築き上げられて來た。されば現代日本の政治、外交、産業に對する深い理解は當然明治初期の研究に出發せねばならぬ。而して現在明治維新を去る七十年、明治史は既に現代史の域を脱し、眞に客觀的に研究し得らるべき時代となつた。慶應義塾經濟史學會同人諸氏は、過去三年餘に亘つて此の時代の經濟史研究に努力を傾け、その業績亦刮目して見るべきものあり、その銳意研鑽に成る珠玉篇十四を収録し、「明治初期經濟史研究」の表題を附して紀要第一冊を二部に分つて刊行した。先づ第一部の卷頭には野村教授の「明治初期經濟史觀」を掲げて該時代に對する一般的理解に資し、以下經濟史の各部門に亙る研究論文が收められてゐる。即ちその農業方面に關するものには小池氏の「明治初期に於ける農業技術の發達」、三邊氏の「明治初期に於ける我國棉

花生産の凋落—本邦紡績業發達史への序論—」があり、工業方面に關するものには伊東氏の「我國に於ける軍事工業の成立過程」、山田氏の「明治初期の化學工業」、小島氏の「明治初期の本邦印刷業に就いて—主として東京市に於ける印刷業を中心に—」(以上第一部所收)等があり、財政金融、保險の諸方面に關するものには大島氏の「明治初期の財政」(第一部所收)、伊東彌之助氏の「通商司政策に於ける爲替會社」、松本氏の「日本銀行の成立過程」及び園氏の「我國に於ける生命保險事業の創生—若山儀一氏を中心として見たる—」等があり、又交通方面に關しては三井氏の「明治初期交通制度の文化史的考察」があり、新聞事業に關しては西田氏の「明治初期新聞發達史概説」があり、更に思想方面に關しては下田氏の「維新前後外國貿易論」及び上坂氏の「明治初期佛敎」(以上第二部所收)がある。更に第一部の卷頭には數葉の口繪を掲げ貴重な經濟史料を展示し、それに懇切なる解説が附せられてゐることも閑却してはならぬ。以上の諸論文には勿論一貫した統一はないが、その一つ一つが苦心研究の結晶であり、これ等の一つ一つを熟讀玩味することに依つて必ずや明治初期の經濟活動の本體を把握し得べきを信ずるものである。今後更に同人諸氏の研究の成果が次々に發表せらるべきを期待し、同會の發展を祈る次第である。(巖松堂發行)(有賀春雄)

先史地理學研究 (小牧實繁著)

一面非常に古い學問でありながら、尙ほ今日その科學としての

地位にすら迷つてゐる地理學に對して、いま新たに小牧氏によつて先史地理學といふ分野が展かれた。それは學界にとつて確かに一つのセンセイショナルな事件であらねばならぬ。先史地理學といふ表題をみる者は、先づ第一にそれが果して學問として成立し得るであらうか、果して成立し得るとすれば、然らば如何なる目的を有し、如何なる任務を擔ふものであるかといふ疑問を抱くであらう。そこで著者小牧氏は先史地理學の實際的研究の成果を展示する前に、豫めそれが學問として立派に成立し得るといふ理論的根據を示す必要を感じられた。即ち本書を二部に分ち、その第一部を以て「先史地理學の理論」となし、こゝに先史地理學の理論的構成を論述する。著者は先づ第一に地理學の史的發展を回顧しつゝ、その對象を規定して統一的全體としての、景觀の意義に於ける土地地域であるとなし、又その方法に就いては、空間的擴がりをもつ土地・地域に就いて、土地・地域内の諸現象、即ち地域構成または景觀構成の全要素を、相互關聯的に、統一的全體的に見るものであると説くのである。即ち著者は地理的環境論や地理的史觀を以て眞の地理學的成立の所以に非ずとしてこれを斥け、飽くまでも景觀の意義に於ける土地地域を以て地理學の對象となし、自然・人文諸現象を景觀構成の要素として全體的に把握することを以て地理學の本質的任務とするのである。斯くの如く地理學の本質を決定したる後、著者は更に歴史地理學に論及し、地理學は現在及び過去に於ける自然現象・人文現象の構成する統一的全體としての土地・地域（景觀）を描出することであり、その過去に互るものが即ち歴史地理學を構成すると説くのである。

書評

即ち歴史時代の或る断面に於ける土地・地域を説明敘述するものが歴史地理學であるとなし、従つて歴史時代の一断面として先史時代をとれば、即ちそこに先史地理學が成立し得るとするのである。この間路整然として完璧なる先史地理學の理論的體系が打ち立てられてゐる。斯の如き體系を與へる爲に著者は本書の約三分の二を費してゐるが、それは地理學そのものが、今日尙ほその對象や方法に就いて確定不變のものが與へられてゐない證據であらう。斯の如き理論的根據の下に第二部の「先史地理學的研究」に於て、「越後及羽後海岸平野の研究」、「河内平野の研究」及び「出雲平野の研究」の三篇が論述されてゐる。第一部の理論篇に對して第二部の研究篇がその分量―單に分量だけではあるが―に於て聊か物足らぬ感もないではないが、然しこの種の研究は考古學研究と並行すべきものであり、考古學研究の頗る困難な實狀から見れば、此の種の先史地理學研究を多く期待することは不可能であり、寧ろ珠玉の如き是等の論篇に心から敬意を表すべきであらう。蓋し本書の出現によつて先史地理學は科學の系列の中に不動の地位を獲得せりといふべく、本書に於て提唱された研究法は必らずや我が地理學界に一新機運を導く源となるであらう。

（京都市、内外出版印刷株式會社發賣）（有賀春雄）

大和島庄石舞臺の巨石古墳

（京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十四冊）

大和國高市郡高市村大字島ノ庄の石舞臺は、先年埼玉縣北埼玉郡太田村大字若小玉字保井に於て發掘せられた古墳と同じく、其